

アミール・アルゲンと彼がホラーサーン などの地域において行った二回の戸籍調査について

チョグト（内モンゴル大学）

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

アルゲンはモンゴルのオイラト部に属し、モンゴル帝国の時代に、影響力を持っていた歴史上の人物である。彼はモンゴル帝国の支配するホラーサーンなど西アジア地域の第四任アミールであり、モンゴル帝国による西アジア地域の統治と管理に様々な計策を出し、大きな役割を果たし、その名前を歴史に残した。当時、著されたモンゴル帝国時代の歴史に関する様々な史料の中で、彼はアミール・アルゲン、あるいはアルゲン・アカなどと呼ばれている。彼はモンゴル帝国の西アジア地域に対する基本政策を忠実に実施し、モンゴルの大汗が現地に対して行った直接的な統治を強化し、経済発展を促進する上で、積極的な役割を果たした。

国内外において、モンゴルの西アジア征服と統治に関する研究は多くない。その問題を扱う論文の中で、本田実信の論文「阿母河等処行尚書省考」¹が相対的に大きい影響力を持っている。その文章は、モンゴル帝国の西アジアに対する征服と統治について詳しく記述しているが、モンゴル帝国が西アジアに派遣したアミールたちの業績と彼らが取った具体的な措置については全面的には述べていないから、この問題に関するさらなる研究が必要である。

モンゴル帝国の西アジア地域に対する統治と措置をさらに理解し把握するために、本論考は上述の論文に基づいてアルゲンの生涯の事績を簡単に述べ、同時に彼がホラーサーンなどの地域において行った二回の戸籍調査の過程と意義を紹介することにより、モンゴル帝国の西アジア地域における統治と措置を考査した。

¹本田実信、『モンゴル時代史研究』、東京：東京大学出版会、1991年、第101-127ページ。

(一)、アルグンの族源と早期の歴史活動について

アルグンの生涯と実績について紹介する前に、まず、その生涯と実績に関する歴史上の記載を正確に理解し、把握する必要がある。モンゴル帝国の時代にラシード・ウッディーンによって著された『集史』とジュヴァイニーによって著された『世界征服者の歴史』などの史籍には、アルグンの生涯と実績についての記載がある。これらの史籍によれば、アルグンはモンゴルのオイラト部に所属し、モンゴル帝国の時代に、影響力を有する歴史上の人物であることが分かる。アルグンについて、ラシード・ウッディーンの『集史・オイラト部紀』には次の記載がある。

(例一)

イランとトゥーラーンには、過去も現在も多くのオイラト部アミールがいる。しかし、彼らが所属する支部が分からない。彼らの出身は彼らの間でしか分からない。その中に、アミールアルグン-アカという人がいる。彼の出身は人々に尊敬されるものではない。オゴディ・カーン時期のある飢饉の年、彼の父は彼をジャライル部族のアミールであるイルゲ・カダーンに売って、牛の足一本と交換した。アミールイルゲ・カダーンはオゴディ・カーンのアタベク（父候）として仕えていた。しかし、イルゲ・カダーンは自分の子をケブテウル（宿衛）としてオゴディ・カーンのケシクに入れると同時に、アルグン・アカも一緒送った。アルグン・アカは機敏であるから、段々と地位を手に入れ、イランの国政を握ってバスカクの職まで担当した。

アルグンの出身と成長については、『集史・ジャライル部紀』にも類似した内容が記載されている。

(例二)

飢餓に面し、アミール・アルグンの父は、アミール・アルグンをイルゲ・ナヤンの父カダーンに売って牛足を交換した。しかし、カダーンは自分の息子にオゴディ・カーンのケブテウル（宿衛）を担当させる。また、アミール・アルグンを自分の息子のノコルにさせた。即ち、アルグンはその子の召使いになった。アルグンは機敏で利口であり、また話し好きで頭

がいい人だから、すぐに出世して、同世代の人々より高い地位を獲得した。²

以上の二つの記載において、アルグンの出身と成長に関する内容は基本的に一致している。しかし、細かく比べると、上記の史料には具体的な人名などに異なる点がある。例えば、(例一)では「彼（アルグン）の父は飢饉の年に、彼をジャライル部族のアミールイルゲ・カダーンに売った」と記述しているが、(例二)において、その人は「イルゲナヤンの父カダーン」である。上記の二つの記載のうち、どちらが事実と一致しているのだろうか？ それに関しては、さらなる研究が必要であると思われる。いずれにしても、上記の記載を通じて、アルグンの出身の部族の情報を得た。また、その成長や経歴などの重要な情報も手に入れた。

それ以外、ほかのモンゴル帝国の時代に著された史籍の中にも、アミール・アルグンの出身に関する記載が見られる。

ジュヴァイニーによって著された『世界征服者の歴史』は、アルグンの事績を記載するもう一冊の重要な史籍である。この本ではアルグンのホラーサーンでの活動を大量に記述している。しかし、彼の出身と家族に関しては詳しく記載されていない。『世界征服者の歴史』では、アルグンの出身と家族について次のように記載されている。

(例三)

アミール・アルグンはオイラト部の人であり、彼の父タイチュは千戸である。³

ここでは、アルグンの父の名前だけでなく、千戸であることも述べられた。これも重要な記載である。『集史』の記載によれば、オイラト部によって構成される千戸は四つある。⁴しかし、四つの千戸について、『集史』に

²著者ラシード・ウッディーン、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、1992年、第153ページ。

³著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』（下）、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第603ページ。

⁴著者ラシード・ウッディーン、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、

は詳しい記載がない。アルゲン祖先について、『集史』には前文で引用した二つの記載以外に、何の情報も見つからない。しかし、アルゲンの子孫に関しては詳しく記載されている。

(例四)

彼の息子は、キレイ・メリク、タリヤチ、ナウルズ、レクズィ、ハージー、ヨル・クトルグ、ブルドクとオイラタイである。⁵孫はクレク⁶などたくさんいる。娘も大勢いる。何人かの娘は君主とアミールたちに嫁いだ。また、彼の息子であるナウルズとレクズィは(チンギス・カン) 皇族の娘と結婚し、チンギス・カンの娘婿になった。⁷

アルゲンがオゴディ・カーンの宮廷に務めてからのことについて、関連の史籍には詳しい記載がない。しかし、『世界征服者の歴史』の記載から、アルゲンの従事する仕事に関する情報が得られる。

(例五)

若いにも関わらず、オゴディ・カーンの宮廷に入り、ビチクチ⁸を担当した。ますますカーンに寵愛された。まだ若い彼をカバン⁹と一緒に、重要な使命を与えてヒタイ(北中国)に向かわせた。彼は少しの間、ヒタイに泊まり、カーンに会見した。カーンはアルゲンを信頼し、エディグ・テムル¹⁰とコルクズ¹¹の案件の審理と調査をアルゲンに任せた。¹² エディグ・テムルはコルクズが朝廷での地位を固める前に、機先を制し、コルクズの活動をカーンに報告した。そして、エディグ・テムルはトングズ¹³(Tonguz)を推薦し、皇帝の前で、コルクズを貶しめ、罪を被らせ

1992年、第368ページ。

⁵キライ・メリ、タリアジ、ニウウルシ、レケジ、ハジ、イカンレ・フトル、フレドへいとカンイシダ
イは中国語でそれぞれ乞来-灭里, 塔里阿只, 涅兀鲁思, 列克集, 哈只, 亦斡勒- 忽都鲁, 不勒都黑と斡亦刺
台である。

⁶中国語で古列克であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

⁷著者ラシード・ウッドイー、余大鈞、周建奇訳『歴史集成』第一巻第一分冊、北京：商務印書館、
1992年、第198ページ。

⁸モンゴル語の音訳で、書記、秘書のことである。

⁹中国語で合班であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

¹⁰中国語で額得古铁木尔であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

¹¹中国語で阔儿吉思であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

¹²著者：ジュヴァイニー、訳者：何高濟、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モ
ンゴル人民出版社、1980年、第603ページ。

¹³原文は通忽思であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

た。鎮海に恥を搔かせようとした人々は、彼のいない間に、カーンに彼の
ことを告発した。結果として、アミール・アルグン、クルバカ¹⁴(Qurbaqa)
及びシャマスッティン・カマガル¹⁵(Shamas-Din Kamagar)は皇帝の命令に
より、この案件の事情を調査した。¹⁶

以上の記載からも分かるように、アルグンはオゴディ・カーンの宮廷に入
ってから、ビチクチを担当したことがあった。前述の『集史』に記載された
内容(例一)(例二)と一致している。しかし、彼はジャルグチ(即断事官)
として、エディグ・テムル¹⁷とコルクズの紛争に関わる。モンゴル帝国の時
代に、ビチクチとジャルグチの職務は極めて近いから、筆者はアルグンがオ
ゴディ・カーンの宮廷でビチクチを担当すると同時に、ジャルグチを兼任し
た可能性は大きいと判断した。

(二) アルグンはモンゴル高原とホラーサーンの間で往復する

西征が終わって、チンギス・カンがモンゴル高原に帰った後、ジャラール
ッディーンは印度からホラーサーンに戻り、一部の町を奪い、モンゴルの統
治者と激しい対抗を展開した。そのため、チョルマグンはオゴディ・カーン
の命令に従い、軍隊を率い、ジャラールッディーンと戦った。

チンギス・カンの時代に、モンゴルの軍隊はホラーサーンを占領し、ジョ
チはチン・テムルをその地域の長官に任命した。チョルマグンがホラーサー
ンに着いたのち、チン・テムルはオゴディ・カーンの命令により、チョルマ
グンと一緒にその地域を征服した。現地の指揮権を争って、チョルマグンと
チン・テムルの間に紛争が起こった時、オゴディ・カーンは現地の指揮権を
チン・テムルに渡すという命令を下した。こうして、チン・テムルはモンゴ
ル帝国がホラーサーン地域に派遣した第一任のアミールとなった。

、チン・テムルはホラーサーン各地に使者を派遣し、統治を固めた。当地
の経済はすぐに回復し、さらなる発展を遂げた。チン・テムルが亡くなった
後、ノサル¹⁸がアミールになった。当時、モンゴルの統治者内部、そして、

¹⁴原文は忽儿巴哈であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

¹⁵原文は苦思丁・迦马格尔であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

¹⁶著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第589-590ページ。

¹⁷中国語で額得古铁木尔であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

¹⁸原文は诺撒耳であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

モンゴル統治者と現地官僚の間に、紛争が相次いだ。そして、現地官僚の権力は膨らみ、モンゴル帝国の税収を把握し、モンゴル帝国の統治者を悩ませた。

モンゴルの大汗にとって、如何に現地に対する管理と統治を強化するか、税収の仕事をいかに有効的に展開するかは、解決すべき最大な問題である。だから、コルクズはアミールになってから、戸籍調査や、税収の再開などの措置を取って、上記問題を解決し、ホラーサーンとマーザンダラーンなどの地域の統治秩序を回復した。しかし、当時、チン・テムルの息子であるエディグ・テムルとコルクズはその地域の指揮権奪取の紛争に陥り、宮廷で相手を誹った。大汗は紛争を解決する為に、事情調査をアルグンに任せた。最終的に、この事件はコルクズの勝訴に終わった。コルクズは勝訴して引き継ぎアミールを担当し、またアルグンを連れてホラーサーンに帰った。まもなく、アルグンは又モンゴル高原へ派遣された。その後、コルクズはチングス・カンの黄金の氏族のメンバーたちと言い争って、死刑に処された。トレゲネ・ハトンは、オクサス川からアールス、グルジア、ルーム及びモタリなどの地域の統治権をアルグンに渡した。¹⁹

アルグンはモンゴル高原からホラーサーンへ戻って、ヤルリグ²⁰(yarligh)を読み上げて、各地の長官を任命し、そして滞納の賦税を徴収するために弛まぬ努力を重ねてきた。チョルマグンとバイジュはホラーサーンに来てから、戦乱に乗じてその地域を自分の私有財産と見なした。特に、オゴディ・カーが亡くなった後、諸王は各地域を巻き上げて、勝手に賦税を徴収し、ヤルリグ(yarligh)と牌子を発行し、当地を混乱に陥らせた。この状況のもとで、アルグンは現地の秩序を迅速に回復させる為に、税収軽減の政策を取ったから、現地の人々に擁護された。これまで、モンゴル統治者に反対する態度を持っていた人々も相次いでアルグンに帰順した。

グユクが即位したのち、アルグンはモンゴル宮廷に赴き、グユクに謁見した。グユクは彼に虎頭令牌とヤルリグ(yarligh)を賜った。モンゴル高原からホラーサーンへ戻ったアルグンは、各地にさまざまな宮廷と庭園を建設し、

¹⁹著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第604ページ。

²⁰原文は札儿里黑(yarli`gh)で、勅令文書のことである。

現地の人々に歓迎された。当時、アルグンの活動に反対するモンケ・ボラド²¹はモンゴル高原に赴き、グユクにアルグンを誹った。その情報を聞いたアルグンは、自ら宮廷に赴き弁明しようとしたところで、グユクが亡くなった。そしてエルジギテイがホラーサーンに駐在するという情報が伝わってきたため、アルグンはアミールフサインをオールドへ派遣し、彼自身はホラーサーンに残ることにした。

アルグンはエルジギテイのために、積極的に食糧などの軍需物資を用意した。しかし、各地諸王は勝手に賦税を徴収し、また、エルジギテイの徴発と要求が過酷であったため、現地の人々は困り果てていた。

以上の状況に鑑み、アルグンは再び宮廷に赴き、現地の状況を如実に報告した。朝廷でモンケ・ボラドと激しく論争し、勝利した。彼はホラーサーンに戻ってまもなく、クリルタイに行つてモンケに謁見し、ホラーサーンなどの地域の様々な問題を如実に報告した。モンケはアルグンにホラーサーンで土地と戸籍を調査させ、税収の徴収などを強化させるように命じた。

フレグがイランに到着した時に、アルグンは自ら迎え、また、フレグを強力に支えた。まもなく、彼はフレグの命令に従い、再びモンゴル宮廷に赴き、モンケに現地の情報を報告した。アバカ・ハンがイル・ハン国を統治した時期に、彼は引き続き、各地の包税制の主管の職務を担当した。バラクがイル・ハン国に侵入した時、アルグンはイル・ハン国の左翼軍隊を率い、バラクと戦ったが、失敗した。1275年に、アルグンはトゥース²²のちかくにあるラートカーンの領地で亡くなり、ここに葬られた。

(三) アルグンがホラーサーンで戸籍調査を行った過程と意義

モンケに謁見した時から、アルグンはホラーサーンなどの地域での賦税と雑税の徴収で起こった嚴重な問題を如実に報告し、またヤラワチの河中地域での賦税徴収の方法を学ぶように提議した。ヤラワチの河中地域での賦税徴収については、『世界征服者の歴史』に具体的に記述されていないが、この本

²¹中国語で蒙哥孛剌であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

²²中国語で图思であり、参考になる訳文がないから、音訳を採用する。

の下編『アミール・アルゲンがクリルタイに赴く』という章節の関連記載を通じて、次の内容が分かる。

(例六)

その結論のポイントは、百姓が負担する賦税と様々な勝手な雑税の数が多すぎることで、百姓が四散する原因となっている。だから、ヤラワチの河中地域での賦税徴収の方法で、賦税を徴収すべきである。即ち、コプチュル(qupchur)税のことである。人々が毎年納める税金は財産と納付の能力に基づいて決められるから、規定額の税金を納めたら、同年内には納める必要がないし、ほかの税金を負担させてはいけない。こうやって決めた。

23

以上の記載によれば、賦税を徴収する具体的な方法は「ヤラワチの河中地域における賦税徴収の方法」であり、即ちコプチュル(qupchur)税に関する内容であると推測できる。また、上記の「こうやって決めた」という言葉からも、アルゲンがホラーサーン地域で、ヤラワチの賦税徴収と同様な措置を取ったと判断できる。

アルゲンは上記の決定をモンケに報告した。モンケは彼の提案を聞いたのち、以下の勅命を下した。

(例七)

金持ちは毎年十ディーナールを納めるべきであり、財産に応じて、貧しい人は一ディーナールを納めるべきである。この税収の全部をハシャール(hashar)、ヤム(駅)と使臣の生活費(ikhrajat)などに使う。それ以外は、百姓を邪魔してはいけないし、不法な徴収を行ってもいけない。さらに賄賂を受け取ってもいけない。彼(アルゲン)は各状況に応じて、ヤサ²⁴を制定することができる。²⁵

²³著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第615ページ。

²⁴モンゴル語の音訳で、法律、条例のことである。

²⁵著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第615ページ。

モンケの以上の勅令の内容から見れば、裕福な人と貧しい人に対し、異なる税収方法を採用するという条文を制定したのはアルグンのアドバイスを採用したからである。同時に、モンケはこの地域の最高の権力をアルグンに与え、ノコル²⁶たちと他の地方官僚を任命した。

アルグンはモンケに謁見し、ホラーサーンに帰ってから、大汗の命令を如実に実施し、各地に派遣するアミールとビチクチを新たに任命し、議論を通じてコプチュル(qupchur)税²⁷の徴収額を決めた。

(例八)

彼は勅命に従い、アミールと書記を任命し、連日相談を重ね、コプチュル(qupchur)税の徴収額を決めた。最後に、戸籍調査を実施した時に、税額を毎年十人ごとに七十的那を納めるべきだと定め、アミールと書記に戸籍とコプチュルを制定させた。ホラーサーンとマーザンダラーンにおいて、彼は諸王を代表するモンゴルアミール及び彼の親戚であるノク²⁸、オルグ・ビチクチであるハファヘルティン・ヒキシティ²⁹、丞相イエスティン・タシエル³⁰を彼の代表として指定した。彼はナイマダと私の父、サシボヂマン³¹をイラクとイエツダに派遣した。(中略)そして、ツルマダイ、サリヘブホワ³²とマリクサドル・アルディンに、タブリーズの火者であるマイサヅティン³³と協力してもらい、戸籍の調査、千戸の認定とコプチュルの徴収を手配させた。(中略)彼はダルバンを経由し、グルジア、アラン及びアゼルバイジャンに赴き、戸籍調査、コプチュル税の徴収などの仕事を完成し、イラクに向かった。³⁴

以上の記録には、アミール・アルグンがホラーサーンなどの地域で行った戸籍調査とコプチュル税の徴収の定額など具体的情報が記載されている。そ

²⁶モンゴル語の音訳で、部下のことである。

²⁷コプチュル税は能力によって納める税金が異なる税のことである。

²⁸原文は脳忽であり、参考になる前例がないから、音訳を採用する。

²⁹原文は哈法合魯丁・比希昔惕である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

³⁰原文は撒希伯底万である。参考になる前例がないから、音訳を採用し、財政大臣のことである。

³¹原文は也速丁・塔希耳である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

³²原文は撒里合不花である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

³³原文は麦术督丁である。参考になる前例がないから、音訳を採用する。

³⁴著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第617-619ページ。

の戸籍調査はホラーサーン、マーザンダラーン、イラク、イエツダ、グルジア、アランとアゼルバイジャンなどの地域で同時に行われた。戸籍調査を通じて、当地の金持ちと貧乏な人々の経済状況を調べ、それに基づいて以上の税収の定額を定めた。つまり、徴収する税額について、現地の人々にとって負担できない状況を改善した。モンゴルの西アジアに対する統治が危機に直面した時、現地住民を安定し、社会経済の発展を促進し、モンゴルの統治を固める面において、アルミアルホンの以上の措置は積極的な役割を果たした。

アルホンの戸籍調査が完成した時に、フレグがイランに到着した。アルホンは碣石でフレグに謁見した。その後、彼はフレグに依頼され、再びモンゴル高原に赴き、現地の状況について報告した。アルホンはホラーサーンから来た異なる政治見解を持つ使臣たちとの論争で勝った。そして、モンケに信頼された。この時期に、モンケはホラーサーン諸地域を自分の親戚と弟たちに分けた。³⁵

アルホンはモンゴル高原から、自分の領地に帰って、アランバイ³⁶に行つてフレグに謁見した。フレグは彼をグルジア(今のグルジア)に派遣し、再び戸籍調査を行わせた。

(例九)

アルミアルホンはアラン地域にいるフレグを謁見しに行った。ここに到着して報告した後、彼は谷儿只に行つて戸籍調査を行い、現地住民を千戸に分けた。初めてのコプチュル税の税額を毎年十人ごとに七十的那を納めるべきだと定めた。ハシャール(hashar)、駅(yams)と馬(ulagh)の費用と軍隊の出費は予想を超え、当時定めたコプチュル税の税額を以てカバーできないため、足りない分は定めた税額の比例に応じて分担させる。(中略)アルホンはこの状況を報告し、金持ちのコプチュル税の税額を500的那に訂正し、貧しい人々が納めるべき1的那も比例に応じて調整するよ

³⁵著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第620ページ。

³⁶原文は阿兰拜であり、参考になる前例がないから、音訳を採用する。

うに命令された。新たな税収を行うために、戸籍調査も徹底的に実施された。³⁷

上記の記載から分かるように、今回の調査において、アルミアルホンは戸籍調査を実施しただけでなく、現地住民を千戸に分け、コプチュル税の税額を改めて調整し、裕福な人々と貧しい人々に対して異なる税収政策を取った。

周知のように、アミール・アルグンの管轄地域に、その後イリ・ハン国が建てられた。フレグをはじめとするイリ・ハン国の統治者たちは千戸制度を普及させ、現地に対して長期的かつ有効な統治を実施した。しかし、実際に、現地で初めて戸籍調査を行い、千戸制度を実施したのはアルグンである。だから、モンゴル帝国がイランなどの西アジア地域を統治する過程において、アルグンは極めて重要な役割を果たしたといえる。我々には、アルグンの実績と彼の果たした役割について深く検討し、研究する必要がある。

³⁷著者：ジュヴァイニー、訳者：何高済、校閲：翁独健、『世界征服者の歴史』（下）、フフホト：内モンゴル人民出版社、1980年、第621-622ページ。